

〔研究紹介〕

若き教育学徒の自己陶冶 － 博学連携と少人数学級編制への主題的着眼 －

教育学専攻
指導教員 助川 晃洋
修士課程2年 葉 慧琳
修士課程1年 顧 成

大学院修士課程の助川ゼミ（教育方法学研究室）では、2024年度後期から1名（葉）、2025年度に1名（顧）が新たにメンバーとして加わった。ともに中国出身の留学生であり、それぞれの研究構想（テーマ、概要、文献）は、下掲の通りである。

* * * * *

葉慧琳 中国における博学連携の現状と課題 － 紹興魯迅記念館のケーススタディー

日本では博物館に対して、その機能を活用して、例えば所蔵するコレクションの展示や施設の公開、ワークショップ（体験講座）の開催、専門的職員としての学芸員の講師派遣などを通じて、学校現場と協力し、先生の授業づくりや子どもの学びを支援することが要望されており、学校側には、学習指導要領等において、博物館とタイアップした教育活動を積極的に展開することが推奨されている。こうした博学連携の動向に関する学術論文や実践報告も、すでに数多く発表されている。しかし中国では、博学連携のプラクティスとリサーチの両方が、まだ十分には蓄積されていないように思われる。

そこで本研究では、中国における博学連携の現状と課題について、事例的に検討し、実証的に把握することを目的とする。具体的には、浙江省紹興市越城区に所在する魯迅記念館（魯迅故里、Lu Xun Memorial Museum）の取り組みに着目して、複数回の訪問・実地調査に加えて、同館スタッフや教師、児童生徒（特に高校生）にインタビュー及び質問紙による調査を実施し、データを収集・整理・分析することで、新たな知見を得ることをめざす。またそれを踏まえて、今後の中国における博学連携の振興を促し、充実に資するべく、一つの汎用性のある推進プログラムを開発する（関係諸機関にとって有益な参照モデルを提案する）ことを試みたいと考えている。

- 青木豊編『人文系博物館教育論』雄山閣、2014年
- 伊藤寿朗『市民のなかの博物館』吉川弘文館、1993年
- 小笠原喜康『博物館教育論』ぎょうせい、2012年
- 小川義和編著『協働する博物館 博学連携の充実に向けて』ジダイ社、2019年
- 近藤良子・川向富貴子・米田寛「岩手県立博物館における博学連携の意義と課題－体験学習室資料の製作をとおして－」『岩手県立博物館研究報告』第39号、岩手県立博物館、2022年3月、pp.34-58.
- 多々良穰「高校教員から見た『博学連携』のあり方」『金沢大学考古学紀要』第39号、金沢大学人文学類考古学研究室、2018年2月、pp.67-79.
- 中尾浩康「児童・幼児と学社融合－学習指導要領と博物館を中心に－」『東京家政大学教員養成教育推進室年報』第9号、東京家政大学教員養成教育推進室、2020年2月、pp.97-107.
- 八田友和「学校教育における博物館活用の実態と課題－兵庫県東播磨地域に所在する学校へのアンケート調査を踏まえて－」『日本生涯教育学会論集』第38号、日本生涯教育学会、2017年9月、pp.51-60.
- 日名地健斗・深谷圭助「日本の博物館教育における学校連携の必要性に関する一考察－『日本の博物館総合調査』の分析を通して－」『現代教育学研究紀要』第16号、中部大学現代教育学研究所、2022年9月、pp.77-84.
- 古庄浩明「学校における博物館活動の提案」『博物館学雑誌』第33巻第1号、全日本博物館学会、2007年12月、pp.1-16.

顧成 上海市における「小班化教育」の効果検証

－学級規模の縮小が子どもの学力に与える影響を中心に－

中国の義務教育段階の学校におけるクラスサイズは、「計画生育」（いわゆる一人っ子政策）が実施され、出生人口、ひいては新入生数の抑制が図られたにもかかわらず、特に都市部において、国家教育部が設定した基準を超過しており、先進諸国に比べてかなり大きい。こうした状況は、これまでずっと放置されてきたわけではなく、「小班化教育」の取り組みが、1996年に上海の小学校で始まって以降、北京や天津、広州、大連、南京などで順次進められている。「『小班化教育』とは、子どもの個性ある健全な成長を目指して、学級規模を縮小し、教育の内容・方法・様式・策略などの改革を行う学級教育である。（中略）小班化教育とは、学級規模を小さくすることだけでなく、小規模化した学級にふさわしい教育を行うことである」。「『小班化教育』はまず学級規模を縮小する。それにより、教員は児童生徒に適切な指導を行うことができる。また教育過程において、児童生徒の参加頻度・深度が高められ、児童生徒の主体性が発揮できる」（蔣莉・李東林・山崎博敏「中国の小中学校における『小班化教育』と学級規模の教育的効果」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部（教育人間科学関連領域）』第55号、広島大学大学院教育学研究科、2007年3月、pp.154-155.）。

しかし「小班化教育」が各地で導入されて、すでに長い年月が経過しているにもかかわらず、その実態や成果を詳らかにした先行研究は、日本はもちろん、当国でもまだ見当たらない。そこ

では、関連文献・資料の検討を徹底するとともに、自分の出身地である上海の学校でフィールドワークを行い、できるだけ多くの一次データを入手し、客観的なエビデンスに基づいて、少人数学級が子どもの学力向上にとってどれほど有効である（あった）のかを解明するつもりである。

青木栄一『地方分権と教育行政 少人数学級編製の政策過程』勁草書房、2013年

韓冰梅「中国における学級規模と『小班化教育』についての考察」『教育経営学研究紀要』第14号、九州大学大学院人間環境学府（教育学部門）教育経営学研究室／教育法制論研究室、2011年9月、pp.75-82.

桑原敏明編『学級編制に関する総合的研究』多賀出版、2002年

志村廣明『日本の近代学校における学級定員・編制問題－過大学級、二部教授問題を中心として－』大空社、1998年

助川晃洋「学級規模に関する実証的研究の方法と結果－少人数学級（30人学級）について議論するための前提として－」『宮崎大学教育文化学部紀要（教育科学）』第16号、宮崎大学教育文化学部、2007年3月、pp.1-18.

展偉静「中国における『得点別学級編成』の現状と、それに対する教師の意識の所在－中国の中学生と教師を対象とした調査をもとにして－」『学校教育学研究論集』第13号、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、2006年3月、pp.41-54.

中西啓喜『教育政策をめぐるエビデンス 学力格差・学級規模・教師多忙とデータサイエンス』勁草書房、2023年

花井信「学級編制か学級編成か」『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』第52号、静岡大学教育学部、2002年3月、pp.209-215.

堀内孜編著『学級編制と地方分権・学校の自律性』多賀出版、2004年

山崎博敏『学級規模と指導方法の社会学 実態と教育効果』東信堂、2014年

* * * * *

近年の我が国では、教師の子どもに対する望ましいかわり方を言い表す際に、「寄り添う」というフレーズがよく用いられる。この言葉は、青年世代（の一部の人たち）にとっても魅力的に響く、あるいは映るかもしれない。しかしそれが、もしもではあるが、努力することを無意識のうちに放棄し、そのことを正当化する役割を果たしているならば、心身ともに元気な（頑張りが利く）年齢のうちからそんなに楽ばかりして本当に大丈夫なのかと老婆心ながら心配になる。

大学院生というのは、己の努力次第で自分は何者かになれる、その可能性を信じて、目標に向かって邁進する人間であるはずだ。誰かが「寄り添ってくれる」ことを当てにするようなヤワではいけない。困ったとき、必要なときにだけ、気が向いたら教員を便利に使えばいい。それでも有益なアドバイスをもらえる保証などどこにもないし、そもそも他人に期待するのは野暮というものだが。

修士論文を書くということが、単なる通過儀礼ではなく、二人にとって希望に満ちた課題であり、福沢諭吉に代表される明治期の啓蒙思想的な意味で、真の独立人となるための学びであってほしいと切に願う。

参考文献

- 大澤絢子『「修養」の日本近代 自分磨きの150年をたどる』NHK出版、2022年
- 岡田努『現代青年の心理学 若者の心の虚像と実像』世界思想社、2007年
- 生越達「寄り添うことと導くこと－『学校Ⅱ』と『ザ・中学教師』のあいだにあるもの－」『茨城大学教育実践研究』第29号、茨城大学教育学部附属教育実践総合センター、2010年11月、pp.223-235.
- 小野浩「近代日本の〈学び〉の構造研究－福沢諭吉『学問のすすめ』の教育論の帰趨を逐う－」『武蔵大学人文学会雑誌』第15巻第2号（通号第57号）、武蔵大学人文学会、1983年12月、pp.13-31.
- 下斗米淳・伊藤美奈子・萩原建次郎・弓削洋子・岡田努「子どもや青年に寄り添うことと指導すること－実践と理論からの学び－」『教育心理学年報』第50集、日本教育心理学会、2011年3月、pp.39-43.
- 杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想 福沢諭吉を中心に』法政大学出版局、1986年
- 竹内洋『大学の下流化』NTT出版、2011年
- 田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わりの場」へ』学陽書房、2001年
- 福沢諭吉『学問のすすめ』岩波書店、1978年
- 福沢諭吉著、富田正文校訂『新訂 福翁自伝』岩波書店、1978年
- O.F. ボルノー著、須田秀幸訳『実存主義克服の問題 新しい被護性』未来社、1969年
- 牧野吉五郎『明治期啓蒙教育の研究－福沢諭吉における日本近代国家の形成と教育－』御茶の水書房、1968年
- 三隅二不二『新しいリーダーシップ 集団指導の行動科学』ダイヤモンド社、1966年
- 森下詩織・松浦均「授業場面における児童に対する教師の『寄り添い』行動について－教師と子どもの物理的距離に着目して－」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践』第67巻、三重大学教育学部、2016年3月、pp.193-204.
- 山住正己編『福沢諭吉教育論集』岩波書店、1991年

執筆分担

アスタリスクが並ぶ二つの行に挟まれた部分は葉・顧と助川の共同、その前後はすべて助川の単独による。